タイトル	みんなで行こう!!ワクワクの森へ
作成者(著者)	水津玉美
作成者(ヨミ)	スイズ、タマミ
出版社・団体	下関短期大学保育学科
出版社・団体(ヨミ)	シモノセキタンキダイガクホイクガッカ
Nii資料タイプ(区分)	研究報告書(教育実践記録等)
ISSN	
掲載誌名	第37回　下関短期大学保育学科　創作発表会研究発表要旨集
巻・号	
開始ページ	6
終了ページ	7
発行日	2024/12/14

下関短期大学
〒750-8508　山口県下関市桜山町1-1

Copyright©2024 Shimonoseki Junior College All rights Reserved.

みんなで行こう‼ワクワクの森へ

下関短期大学　保育学科　（担当教員：水津　玉美）

保育内容研究コース　２年　石井悠莉、田中麻唯、浜本若菜、八木美咲
１年　大瀬良結花、岡村綺乃、貝原咲希、河原千夏、兒島麗奈、佐藤瑠美、末永蓮、原萌々寧、原田芹菜、藤本結華、松尾陽憂、松岡沙也夏、松田千佳、三田楓、宮原遼人、村上綜史、村田瑚乃葉、柳井田千恵実、山根実侑

１．研究の目的

乳幼児教育における課題として、子どもが内発的動機を持ち自発的に活動に参加し主体的に取り組める保育環境の構築が重要視されている。特に歌や手遊び、ダンスといった身体表現活動は子どもの好奇心を刺激し感性や想像力を育むだけではなく保育者にとっては不可欠であり必須のスキルである。本コースの研究では、乳幼児の興味を引く保育内容の選定および構成を通して、保育技術の実践的に向上させること、さらにこれらの技術を将来の保育現場において効果的に活用できるよう、学生の指導力や柔軟な対応力の育成にも焦点を当てている。本研究では、言語表現や音楽表現、身体を使ったパフォーマンスなど、様々な表現手法に触れる機会を提供した。学生同士が積極的に意見を交換し、協働的な取り組みを進める中で設定された今回のテーマは「ワクワクの森での体験」に決定した。このテーマに基づき、物語の舞台を「ワクワクの森」とし、子どもたちがクイズやダンスを通じて冒険を進め、最終目的地である「噂のレストラン」を目指す内容の構成にした。

特に、レストランでのオムライス作りの場面では、学生がオムライスの調理過程を身体で表現した。足の動きで炎を表現するなど、視覚的にも楽しめる工夫を凝らした。このような視覚と身体を統合した表現活動は幼児が自然に理解し、楽しめるだけでなく、教育的な要素も含んでいる。また、活動中に学生たちは、乳幼児に対してわかりやすく伝えるための言語的・非言語的なコミュニケーションスキルや、状況に応じた即時対応力の向上にも取り組んだ。た特に、子どもたちの予想外の反応や自発的な発言に対して柔軟に対応するための準備を怠らず、現場における問題解決能力等にも繋がる。実践力を身につけるための活動の在り方より専門的な保育技術の向上を目指していくよい機会となった。

２．　研究の方法

１）題材の決定

本研究では、日常生活の中で子どもが身近に経験している「食べること」や「遠足」を題材として選定した。これにより子どもが自分の体験を自然に重ね合わせたり、豊かなイメージを膨らませたりすることを狙いにした。また、子どもと学生の双方向的なやり取りを楽しめるよう、「ダンス」や「歌」、さらには「身体表現」など、複数の表現手法を融合させた構成としました。加えて、声の抑揚、話すスピード、言葉のつなぎ方を緻密に考慮し、効果的なステージ演出を実現するための題材を決定した。





２）　テーマの決定

本研究のテーマは「会場一体型の子ども向けステージ」とした。子どもと共にストーリーを進行することを重視し、参加型の要素を強調している。保育の現場では、保育者が日常的に子どもと長時間過ごし関わり合う中で、子どもに伝わりやすい言葉の選び方や、話すスピード、間の取り方などが求められる。このテーマにおいても、子どもの興味を引き出し、自然と物語に引き込まれるような工夫を取り入れた。会場全体を巻き込みながら、子どもたちと共に物語を進行できるよう、ステージの制作においても創意工夫を行った。

３）製作物の決定

シナリオ作成、背景画、小道具、大道具、衣装といった制作物の分担に関しては、学生たちの得意分野や個々の強みを活かすために４つのグループに分かれて作業を進めた。各場面の構成に応じて必要な物品を検討し、特に子どもの興味や関心

を引き出すシーンにおいては、視覚的なインパクトを持たせるため、大きさや見せ方に工夫を凝らした。製作物の素材や大きさ、配置についても細心の注意を払いより魅力的な演出を追求した。

小道具や大道具の制作においては、段ボールを主素材とし、背景画面に一貫性を持たせつつ、場面ごとに適した配置や小道具の使い方を工夫した。場面転換がスムーズに行えるよう、背景と小道具が物語の進行を妨げない演出を心掛けた。

４）効果音やBGMの決定

限られたリソースで効率的かつ効果的にできるようスマートフォンを活用して音楽ジャンルのリサーチを行い、適切な音楽を選定して効果的な演出を行った。特にオープニングでは明るさを引き出す曲を選びクロージングではエネルギッシュな曲を使用して未来への希望を表現した。

３． 研究の内容

１）衣装や小道具の制作

小道具やセットの制作には、日常的に使用される素材や再利用可能なものを活用した。具体的には、布、カラーポリ袋やハンガー、モール等を利用し、さらに前年度に使用した衣装をリメイクして制作を行った。これによりそれぞれの役の特徴を表現し、ステージ上での視覚的な効果や照明の当たり具合や制作のしやすさにも配慮した。限られたリソースをいかにして魅力的に仕立て上げるかという点が学生にとって大きな学びとなった。

２）背景構成の製作

ストーリー全体の流れを意識しながら、場面転換のスムーズさやテンポの速いシーンへの対応を重視した。小道具の制作には、カラーポリ袋、ガムテープ、ホットボンド、大判用紙など、手に入りやすい素材を使用した。また保育現場で実際に使用しているフラフープやカラフルなガードなどを使い、舞台演出に華やかさを加える効果を出した。

３）ステージ練習

ステージにおいては、学生一人ひとりが自分の役割を明確にし、責任を持って取り組むことを重視した。舞台上での立ち位置や見せ方は、演技に大きな影響を与えるため、学生はそれぞれの立場での動きや役割に対して意識的に取り組んだ。特に保育者を目指す学生にとっては、動作を大きく表現することや、立ち位置による見え方の違いなど舞台上の演出がどのように観客に伝わるかを実際に体験することが大切だと考える。そうすることで、演技を通して自分の動作や声が子どもたちにどのように影響を与えるかどのように見えているかを客観的に理解できるようになる。この体験を通じて細かな演出や役割分担、演技の表現方法を学び、自己表現力を高めることができた。演技を通して得られたこのようなスキルは、将来的な子どもへの指導に繋がる基礎的な指導力や自己表現スキルを磨く重要な学びの場となった。また、演技中の立ち位置や動き、配置は子どもの視点から見た際の見やすさや興味を引く要素と直結するため、各場面においてどの位置でどのように動くべきかを学生同士で意見を交わしながら練習を重ねた。

４．反省・感想及び今後の課題

今回の劇活動を振り返り、いくつかの今後の課題が浮き彫りになった。

人数が多いことでより一層のレベルアップを図る必要があり、それぞれの持ち場を責任持って最後までやり遂げることも反省を通して重要であることがわかった。

また、ステージ発表に至るまでは細部にわたる表現力の向上が求める一方で、演じることの楽しさを体験することも重要なプロセスであった。

活動途中で本番が近づくにつれ、準備ができていない箇所があることや段々と練習時間が無くなってくる焦りなど出てきて様々な問題に直面した。仕上げの最終段階で少しペースが遅かった等の反省や振り返りがあったので今後の活動で反省をいかしていきたい。

本コースは会場の子ども達とやり取りしながら進行していく発表であるため、子どもの反応やペースに合わせて適切なタイミングで投げかけを行い、子どもの発言をしっかり受け止め臨機応変に応答できることを予測しながらその力を求めた。

自分の演技に満足しがちになるが、子どもが楽しめるかどうかを常に意識して働きかけを工夫することを意識の基本に置いて活動することが重要であった。また、時間がないからと安易に省くのではなく、時間をかけて工夫を重ねることで学生自身がより高度な保育技術を身につけることができることも何度も伝えていく必要がある。保育現場に出るまでの自信へと繋げる活動を今後も課題としていきたい。